

聖祖晩年に於ける日弁

鈴木隨順

日弁の居住地に関しては「瀧泉寺申状」の冒頭に「駿河国富士下方瀧泉寺大衆 越後房日弁・下野房日秀等謹んで辨言す^①」とあり、又日弁を開山と仰ぐ峯妙興寺の古文書にも日弁の弟子日忍が暦応四年（一三四一年聖滅六十年）に記録したと伝えられている書に「駿河国富士下方瀧泉寺は日弁重代の所領也^②」とあるによって日弁の地盤を知ることが出来る。

建治元年の頃聖祖に直参した後も日弁は富士の下方（現入山瀬）周辺を拠点として同地の農民たちに師説を説き進め次第に教法が浸透していった。このことは熱原法難事件や日興の「本尊分与帳」が証明している。即ち

一、富士下方熱原郷、住人神四郎^③。

一、富士下方同郷、住人彌五郎^④。

一、富士下方熱原郷、住人彌次郎。

此、三人、者越後房下野房、弟子廿人、内也。

一、富士下方江美彌次郎者越後房、弟子也。

一、富士下方市庭寺ノ太郎太夫人道者、越後房ノ弟子也

一、富士下方市庭寺ノ太郎太夫人道ノ子息彌太郎者、越後房ノ弟子也

一、富士下方市庭寺ノ太郎太夫人道ノ舎弟又次郎者、越後房ノ弟子也

一、富士下方市庭寺ノ彌四郎入道者、越後房ノ弟子也

一、富士下方市庭寺ノ田中彌三郎者、越後房ノ弟子也。

従つて日弁は日蓮門下として庶民信仰を打ち立てた先駆者であると言えるのであつて、このことは取り分け注目すべき事柄である。何故なら当時最も社会の底辺に喘ぐ民衆に着眼し、そこに布教の基盤をすえていたことである。

法華經こそ眞の仏典、法華經こそ仏教のすべてだと主張せられ、仏法の邪正をただされた聖祖は「法華經の肝心、諸仏の眼目たる妙法華經の五字、末法の始に一閻浮提にひろまらせ給ふべき瑞相に日蓮さきがけしたり。わたうども二陣三陣つづきて……わづかの小島のぬしらがをどさんを、恐れては……仏の御使となのりながら憶せんは無下の人々なり。」この世界に弘まるべきしるしに日蓮がさきがけした。わが弟子檀邪等も二陣三陣と次々とつづいて、如来使としての務めを果せよ、幕府の厭迫におびえて逡巡してはならないと諭された教えを深く信受した日弁・日秀は熱原の農民たちに師説を伝達し、不正に對し強く反発せよと説き進めたことであろう。故に彼等は捨身の決意を抱くまで眞実の信心に徹することができたのである。

誠に信心とはひとすじにその方に心をかたむけ、ねがいひれ伏した姿を言うのである。

釈尊の魂は法華經、法華經の精神はお題目にまとめられた聖祖の教えを信じ疑わぬ熱原の農民衆は、侍所の所司平頼綱の念仏強要にも屈せず、心底から題目を唱え続けたのである。その強靱な、熱烈な捨身の信仰には、最大なる権力者平頼綱といえども彼等の心に介入することができなかつたのである。

この法難事件は弘安二年九月から十月にかけて起こっているが、この事件の起こる年の正月日弁より聖祖に次のようなご供養品が献上された。

一、越後公御房御返事（定二八七四）

大餅五枚、暑預一本太也、鷄鶉一俵。去今年、饑饉章厲、刀兵と申宛、如シ小ノ三災ノ代。山中ニ送り給ヒ候事、志ノ至リ歟。恐々謹言

正月八日

日蓮花押

越後公御房御返事

去年に続く今年の飢饉（饑饉）に加えて疫病（章厲）さらには兵乱（刀兵）という、まるで世界が壊滅する時に起こるといふ災害（小の三災）のようなそのような苦しい環境下にある時、大餅、山の芋、里芋等を身延の山中に届けられたご供養品に対しての礼状である。

日弁にとって駿河は因縁所生の地であることは既に述べた如くであるが、同じく本尊分与帳によれば南條平七郎母尼は日弁の弟子であると記されている。^⑥又御遺文に記載されている交友関係者としては、富城殿女房内記左近入道。内房女房等、他に聖祖六十歳の賀寿を記念して日弁を招じ開山としたと伝えられる賀島常諦寺の高橋六郎入道夫妻等富士下方の檀越を合わせると相当数の信者がいたことが推定される。故に「小の三災」のような時にも前期のような御供養品が寄進できたのである。

次に去年今年の（三災代）についてみると建治三・四年という年は飢饉に加えて大疫病が流行したことは、富士北麓の生活状況を書いた「妙法寺記」にも見える。前年の建治二年は蒙古襲来に備え、幕府は鎮西の将兵を博多に集め、海岸に石塁を築かせるといふ騒ぎであった。

聖祖晩年に於ける日弁

当時の日本國の飢饉と大疫病による惨めな状態を御遺文から拾い出してみよう。

建治四年二月の松野殿御返事 疫病流行のためかこの二月改元、弘安元年となる。

「但し當世の體こそ哀れに候へ。日本國數年の間、打ち続き、けがちゆきて衣食たへ、畜るひをば食いつくし、結局人をくらう者出来して、或いは死人・或いは小兒・或いは病人等の肉を裂き取りて、魚・鹿等に加へて賣りしかば、人は是を買ひくへり。此國おもいの外に大悪鬼となれり。又去年の春より今年の二月中旬まで疫病國に充滿す、十家に五家、百家に五十家、皆やみ死し。」

と述べ飢えのためとは言いながら、人間の肉まで売られ食べさせられたという誠に信じがたいことが記されている。弘安二年正月の上野殿御返事にも「この兩三年は日本國の内、大疫起りて人半分げんじて候上。」とある。

歴史は幾百年たった後も災害に対しては現今と違い無策であった。特に四面海に囲まれた島の生活は悲惨をきわめていた。本土から約三百キロ離れた八丈島では天災や飢饉に遭うとすぐに餓死者が出たという。

。樫立村の源次郎と申す者の女房杯、十四、十五歳の男子餓死致候を、四日の間食べ候

。治介と申す者の所にて、子供の泣声致候二付、隣家より参り見れば、まだ生きたる子供の股え食い付居候由。

飢えは人を鬼畜にしてしまうのであろうか、誠に「法句經」に「飢えは最上の病なり」とはこのことであらうか、生きるためならわが子でさえ食べてしまうのであろうか、右は明和三年（一七六六）のころの記録である。

尚本題としばらく外れた文面が続くことを寛恕下さい、一つ一つの記録をとどめるために……、松野殿御返事によれば、ここ數年の間打ち続く飢饉によって衣食たえ、畜類を食いつくしたため、ついには人を食う者ができた。或いは人の肉をきり裂いて魚や鹿の肉などに加えて売ったという。正に餓鬼界の縮図である。故に「此の國おもいの外に大悪鬼となれり」とその悲惨な状況を嘆かれたのである。

現代は飽食の時代で色々美味なるもの全国の町筋にあふれ人々は飢えを知らない。このことは有り難いことであるが、ある意味では不幸なことかも知れない。何故なら人間の生活が便利で豊かになればなるほど、逆比例的に自然は破壊され環境汚染は進行しているという事実である。「禍福は糾える縄の如し」と思えば戦慄の走る思いがする。

第二次世界大戦のガダルカナル島は飢えの島。ビルマのインパール作戦や比島の戦場では人間が人間の肉を食したとも聞く、私がシンガポール島での強制労働から開放され復員することができたのは昭和二十一年六月二十二日である。三年六ヶ月の軍歴期間中、最大なるひもじさといえは終戦後作業部隊に編入され、所謂捕虜生活でご飯粒が箸にかからない粥をすすった日々だけである。従って人間が人間を食すとはまゆつばものでしかなかった。

まだ生きている子供の股へ食い付いたという八丈島の飢饉より十一年前のこと、奥羽地方を襲った冷害（一七五五）のため八戸・盛岡などでも多数の餓死者が出たという。

一旦ことが起こると貧困と苦悩にあえぐ民衆の生活は、流人の島でも内地でも大差はなかったばかりか、弘安の時代もそれより五百年を経た明和の時代でも大多数の民衆は死ぬような苦しみに耐え、生き通しに生きぬいてきたのである。

現代は病いに対しては病院と保険が、疫病に対しては衛生施設がある。天災地異には災害救助法があり、そして暖衣飽食の時代でもある。だが一方では自然破壊や公害汚染など人類の生存にかかわる危機的状況下にあるという。その最大にして深刻な問題を惹起せしめた元悪は一九八七年六月、誰もがあまり関心を抱く、いとまもなくして成立した「リゾート法」（総合保養地域整備法）である。

特にゴルフ場建設は増収増の横行、環境破壊、農業による汚染も問題視され、当北茨城市長もゴルフ場反対派の市民によって当選を果たした。隣接の高萩市長はその前例でもある。

人間が快適な生活を追求した結果が地球と人類の未来を危惧せざるをえなくなったと識者はいう。その上湾岸戦争による大量の原油流出や油井炎上は、地球の環境破壊に拍車をかけているという。然も戦後も続く経済制裁でイラクの子供たちが一日に五百人の割合で死んでいるという。

平成四年二月二十二日には、アラブの子供たちに薬と食糧を届けるために、第二十五回世界難民救援コンサートが銀座ヤマホールを会場として行われることになっている。(主催東京ボランティア会) このことを知ったのは上野公園で昨年十二月七日難民救済のカンパをしているボランティアの人に声をかけられたからである。ボランティアとは自己が自己に向かって「なすべし」と命じ、それを根底にした行為、決して他者から命ぜられる、「なすべし」ではない。正に本化の菩薩行ともいえる。

扱本題に変えて、身延は高山と急流に囲まれているため長雨になると交通がとだえ、食糧の道も絶えてしまう、特に弘安元年の春から夏にかけての長雨は入山以来のもの如くであった。

。今年(弘安元年)は正月より日々に雨ふり、ことに七月より大雨ひまなし。このところは山中なる上、南は波木井河、北は早河、西は深山なれば、長雨大雨時々日々につづく間、山さけて谷をうづみ、石ながれて道をふせぐ。河たけくして舟わたらず[㊦]

。駿河と甲斐とのさかいは山たかく、河ふかく、石ををく、みちせばし、いわうや當時はあめは篠をたてて三月におよび、河はまさりて九十日、山くづれ、みちふさがり、人もかよはず、糧もたえて命かうにて候[㊦]

。なかにも今年は(弘安元年)疫病と申し、飢渴と申し、とひくる人々もすくなし。たとひ病なくとも飢えて死なん事うたがひなかるべきに[㊦]

右の上野殿御返事・種々物御消息・時光殿返事がしたためられた翌年の正月、駿河の日弁から前記のご供養品が身

延山中へ送られたのである。建治三、四年の飢饉に加え、疫病の流行、弘安元年の大洪水による交通しやだん等により窮乏している山中の生活に思いはかれた日弁は、大餅等を急遽寄進したのであろう。それは当座しのぎとして送られたものかも知れない。何故なら身延と最も至近の地にある駿河の檀越は主食や副食物の献上を分担していたものの如く、遠方の檀越は銭・衣料品・文具等と地域によって供養品を割り振られるようになっていたものであろうか。故に直弟からの供養品が少ないのはそのためであらう。芋類の供養品は全く南条一族に限られ、松野・西山・高橋の三氏を加えて三十三回数えられ、駿河以外では駿州賀島の高橋入道だけである。

調理師専門学校長中川紀子氏は、里芋は東南アジア、インドが原産地で「タロイモ」とも呼ばれ古くから熱帯アジアでは食用とされてきたという。私も戦時中スマトラ島のテロクペトンで食べたことがあるが甘味はなかった。身延での生活はやはり主食に近い代用食を兼ねていたものであろう。又山芋だけの献上月をみると正月に限られている。中村師は「地方によっては正月必ずこれを食膳に供する風習がある……その風習が偲ばれ芋漬汁としても召しあがられたであらう」と述べている。現今でも正月に餅を食べない集落や家庭が各地域に見られ、餅を食べない正月はイモ正月と言われ主役は里芋である。

雑煮は言うまでもなく餅は主であるが、里芋や人参、大根など入れるのは全国的にみられる。地方によっては供えイモとして床の間に里芋を飾るところもある。特に八ツ頭は高級品で正月の雑煮に入れるのは子孫繁栄の願いがこめられている。京都では芋頭（里芋の親芋）を雑煮に入れる風習がある。かしら芋は正月用の特別の親芋で人中の頭目たる器量になるようにとの願望をかついでのことである。「本朝食鑑」には「正月三朝」芋がしらをもって雑煮の中に入れて、ともにこれを賞す。上下家々、流例となすなり」とある。

雑煮は「おせち」と共に正月三が日の祝膳の料理である。家族一同が雑煮を食べて新年を祝い、末永く仲よく暮ら

すことを願う習わしは先祖伝来の美風である。

江戸風の雑煮は切餅を焼いて小松菜と芋頭を入れる、地方でも雑煮を入れる野菜として里芋はかかせないものとなっている。

自然著である山の芋の献上は正月に五回、十一月に一回だけである。山の芋の滋養は、疲労回復・健胃整腹・下痢止めとして民間薬として用いられている。漢方の古典「神農本草経」には「味は甘温で山野に生じる。体力を補い、寒熱邪氣を払い、氣力をつける。」との効能書が示されている。聖祖は慢性化した下痢症状に悩み、同時に体内の栄養素も不足し、すっかり衰弱せられていた。その上天災や疫病の発生により食餌も乏しい状況下にあることを察した日弁は、滋養強壮にすぐれた山芋、山芋と効用もほとんど同じとまで評価されている里芋を献上したのである。

駿河の國は古くから芋の産地として知られ、江戸時代は鞠子のとろろ汁は特に有名であった。芭蕉の句として「梅若菜、まりこの宿のとろろ汁」が伝えられ、広重の五拾三次にも描かれている。

◎ 「神農本草経」神農、中国上古の帝、始めて人民に耕作を教え農業を興したので神農という。「本草」は本草学の略で、神農が初めて医薬を作ったことを伝えている。

「神農本草経」には三六五種の本草が記され、神農は漢方で医業の祖、薬神とも崇められ、日本でも神農さんと称されて信仰されてきました。特に大阪道修町では、十一月二十二、三日に神農さん祀りが行われている。

二、身延にての供養品と法華経

文永十一年五月十七日はじめて身延の山に入り、弘安五年九月八日住みなれた身延の山を下る。身延在山八年四カ月の間、信者からの御供養回数は約百八十七回ほど数えられる。

直弟及び直弟らしい人からの献上は左にあげた如く九回程度で思いの外僅少である。

○直弟の供養品と賜書

聖祖の直弟及び直弟らしき中から身延山中への供養者を抽出してみると次のようになる。

供養主	歳次	供養品目	御書名	定遺	真・写
最蓮房	文永一二・二・二八	種々ノ御志	立正観抄送状	八七〇	写
浄蓮房	建治元・六・二七	さいみかたびら一ツ	浄蓮房御書	一〇七二	写
覚性御房	建治二・五・五	せいす一つ・ちまき二十	覚性房御書	二八七三	真
覚性房	建治二・五・十	筍二十本	筍御書	一一七七	真
石本日仲聖人	弘安二・一・八	駿馬一疋	石本日仲聖人御返事	一三九八	真
越後公御房	弘安二・一・八	大餅五枚・薯蕷一本 鶏鷄一俵	越後公御房御返事	二八七四	真
智妙房	弘安三・一二・一八	錢一貫	智妙房御返事	一八二六	真
治郎房	弘安四・八・三二	米一斗・茗荷の子	治部房御返事	一八八〇	写
伯耆公御房	弘安五・二・二五	御布施・鹿毛の御馬	伯耆公御房	一九八〇	真

在山九カ年の間それでも毎月平均一・二回、奥深い山中へ御供養品が届けられたことになる。

供物の最後の御書となった「筵三枚御書」は弘安五年三月上旬であるが、これ以降下山までの六カ月間にも信徒の温かい供養があったに相違ない。何故なら「上野殿母尼御前」(一八九七)に病気のため礼状が書けなかったと記されているからである。又紛失や未発見等にて収録されなかった書簡もあるに違いない、その上「新尼御前御返事」

(八六五)によれば「東は天子の嶺、南は鷹取の嶺、西は七面の嶺、北は身延の嶺なり。高き屏風を四ついたてたるがごとし。嶺に立ってみれば草木森森たり。谷に下ってたづぬれば大石連連たり。大狼の音山（よこやま）に充滿し、ましろのなき谷にひびき」という身延山中の自然条件の上、身延への路筋は「新池殿御消息」(一六四四)に詳しい「遠江の国より甲州波木井の郷、身延山へは三百餘里に及べり。宿々のいぶせさ(気味のわるさ)嶺に昇れば日月をいただき、谷へ下れば穴へは入るかと思ゆ。河の水は矢を射るが如く早し。大石流れて人馬むかひ難し。……………道は繩の如く細く、木は草のごとくしげし」という七百年前を思い合わせれば、驚異的な供養回数といわねばならない。これら檀越の人々が聖祖に対して抱いた篤い帰依と敬慕の念、寄せられた御供養品に対しての礼状、書簡によって聖祖の個性、人格、人間的魅力を惹かされると世の識者は言う。その幾つかを挙げてみよう。

1、「弟子と檀越と日蓮との交は、世にも美しき友情[㊦]」矢内原忠雄

2、「日蓮が人の心をとらえることが天才的にうまかった[㊧]」梅原 猛

3、「日蓮消息を読んでいると、真に生きたことばがここにある、という感動がまず襲ってくる。どの一語一語もが、血の出るようないのちの通ったことばばかりである[㊨]」中野 孝次

4、「日蓮においては、もっとはるかに多数の書簡がのこされている。その数は、およそ三百通と算せられる……………彼の文献によっては知られない日蓮を見ることができ。そこには日蓮の思想と信仰の秘密をとく、かくされた鍵

がある[㊩]」増谷 文雄

身延山中に御供養品が届いた時、聖祖はどのような感慨を抱かれて供養品を納受せられたかというところ、この献上品がどれほど貴重な贈り物であることか感謝すると共に、それは日蓮への御供養品ではなく「法華経」への御供養である。と述べられ「法華経」に絶対帰依し、信順せられているのである。例えば「勸発品」の「もしこの法華経を受持

し読誦し正しく憶念し修習し書写することあらん者は、まさに知るべし、この人は即ち釈迦牟尼仏に見えて、仏の口よりこの經典を聞くが如し。まさに知るべし、この人は釈迦牟尼仏を供養するなり」の文をあげ次いで「この文を見るに、法華經は釈迦牟尼仏なり。」と「守護國家論」に説示されている。「守護國家論」は理論の書として「立正安國論」とならんで重視すべきであるとは故田村博士のことばであるが、聖祖の仏教は法華經信仰であり、法華經以外の仏教はすべて謗法であるという主張に貫かれていからである。全仏・余經をすてよ、信すべく崇むべきは法華經・釈迦牟尼仏なりという聖祖の身延での仏道実修の姿勢、法華經の行者としての生活が偲ばれる。その生活のありようを次に記してみよう。

イ、十字六十枚・清酒一筒・薯蕷五十・柑子二十・串柿一連送り給ひ候畢。法華經の御宝前にかざり進らせ候。

ロ、しなじなもの、をくり給て候……此は日蓮を御くやうは候はず、法華經の御くやうなれば、釈迦仏・多宝仏・十方の諸仏に此功德はまかせまいらせ候。

ハ、このすづの物給て法華經の御うへ（飢）をもつぎ、釈迦仏の御いのちをもたすけまいらせ給ぬる御功德、ただをしはからせ給べし。

聖祖の釈尊と法華經への信仰は独特のものであることは、既に述べた如くである。換言するなら法華經信仰から釈尊に対する信仰の觀念が生じたといえるのである。このことに就いて更に例証してみよう、聖祖以前の「法華經」信仰は釈尊信仰を形成するものでなかった。このことは次によって明らかである。

抑も八日は各々の父釈迦仏の生ませ給ひ候ひ日也……是より己来今にいたるまで二千二百三十餘年が間、吉事には八日をつかひ給ひ候也。然るに日本国皆釈迦仏を捨てさせ給ひて候に、いかなる過去の善根にてや法華經と釈迦仏とを御信心ありて、各々あつまらせ給ひて八日をくやう申させ給うのみならず。」

聖祖晩年に於ける日弁

日本国の人々は皆一様にお釈迦さまを捨てて、阿弥陀如来や大日如来などの仏陀を崇めているが、あなたは過去世でどんな善根を積んだのか、法華經と釈尊とに信仰の誠を捧げていることは尊いことであると結んでいる。

三、公名と房号の二重敬称

国語辞典、その他の出典等により、公・房の二字についてまとめてみると次のようである。

公 かたておちでない・平等・正しい・かたよらないこと・おおやけ

1 貴人の姓名などに添えて敬意を表す。貴人、また父や長者などに対する敬称。

2 近世以降は同輩もしくは目下の者の名前に付けて親しさや、軽い軽蔑の意を表す。

。房 元来、房は部屋・つばねのことで、堂のわきにある部屋・小室・すまいを意味し、住房、房舎という義にて居処・住宅・すまい・部屋・つばねなどということ、後に専ら僧侶の居処となる。僧侶の居処の義より転じて僧侶のことを言い、僧侶の名に添えて用いるようになる。

右によれば房号より公名の方が上位のように思われる。聖祖より公名と房号とがすなわち二重敬称となって呼称された人として、日弁の他に伯耆公御房の日興と豊前公御房の二名挙げることができる。

伯耆公御房とあるは日朗代筆による「伯耆公御房消息」である。同書は弘安五年二月二十五日付の書で、聖祖は駿河にいた日興へ宛てたものであるが、病いのため急遽鎌倉から馳せ来っていた日朗に代筆させたものであるが、日朗の自署と花押がしてある。とすれば公房の二重敬称を用いた「伯耆公御房御消息」は日朗同輩又は同輩と等しい人々に対する作法として、公房の二字を用いたのであろうか、何故なら日朗は日像に与えた書六通に公房を付している。日興は日目以下五人に公房を付し。日弁は日法に公房を付し。波木井実長は「イマダミノブサツニワタヲセヨハシマシ候（日興）御事恐悦無極候。」進上 越前公御房と称している。

聖祖が公房の二重敬称を付したもう一人は、「駿河国実相寺御書の対告衆である豊前公御房である。豊前公の名は「実相寺御書」以外に見当たらず、実相寺の学頭であった中老日源と同一人説もあるが明らかではない。豊前公も中老日源も「遷化記録」「御遺物配分事」「本尊分与帳」にも記載されていない。彼等も日興の教化を受け、聖祖に直参したと推定されている人々である。然しながら日源は門徒古事・当家諸門流継凶・別頭流記・年譜改異に中老として載せられているが、豊前公は全くその名が見えない。聖滅後日興と行を共にしたことと考えられるが史料が何一つ見あたらない。然も「実相寺御書」は日興筆といわれる写本であり、前述の如く日興は同輩以下にも公房を付していることから、日興が書写する時誤って付けたものとも思われる。又同書のあて先に「駿河国実相寺」と書かれている。身延に最も近い位置にある実相寺を「駿河国実相寺」と国名を付した点が不自然で、聖祖がこのように国名を書いた宛先は「安房の国東條の郡清澄山浄頭房義城房の本へ奉送す」とある報恩鈔だけであろうか。故に正に不自然であるが、古来真偽云々されたことはないという。既に述べた如く一方は日朗代筆であり、日朗も又日像に与えた書六通に公房を付して親しい間柄を示している。一方の「実相寺御書」は日興の写本であるが豊前公の来歴も伝えられていない、従って「越後公御房」というように二重敬称で聖祖から実質的に呼称されたのは日弁只一人であると言っても過言ではなからう、とすれば何故日弁のみに公房を付したか、然も一再だけではない「御器の事は越後公御房申し候べし」とある。これによっても日弁の卓越せる人格の一端を伺うことができる。

四、御あそびと他行

。弘安元年三月二十一日 教行證御書(定P一四八七)

「甲斐の国の深山に閉籠らせ給ひて後は、何なる至上女院の御意たりと云へども出_マ山ノ内_ヲ諸宗の学者に法門あるべからざる由仰せ候_キ。」

。弘安元年九月六日 妙法比丘尼御返事（定P一五六二）

「去ぬる文永十一年五月十二日相州鎌倉を出でて、六月十七日より比深山に居住して門一町かどを出ず。既に五箇年をへたり」

たとい天皇・皇后の御召しでも山を出て他宗の学者と法門を論ずるようなことはしないと「教行證御書」に言われている。そして六ヶ月後の妙法比丘尼書では入山五箇年をへたと言ひ、両御書とも入山後出遊していないことを示している。次に

。弘安四年十二月八日 上野殿母尼御前御返事（定P一八九六）

「文永十二年六月十七日この山に入り候て今年十二月八日にいたるまで、比の山出づる事一步も候はず。」

。弘安五年正月十四日 内記左近入道殿御返事（定P一九〇七）

「他行之子細、越後公御房の御ふみに申候歎」

「上野殿母尼御前御返事」によれば文永十一年に入山し、弘安四年十二月八日までは身延山を一步も出ることはなかった。ところが、「内記左近入道殿御返事」によれば内記左近の使ひの者が登詣したとき、聖祖は他行中で留守であった。留守の理由は「越後公御房の御ふみに申候」とあるによつて日弁宛にも消息が同時に託されていたものと推定する。何故なら「他行之子細」は日弁より詳しく聞いてほしいと左近入道に伝えているのである。これによつて前掲の上野尼書の弘安四年十二月八日まで山を出づることはなかったとあるによつて即ち十二月九日より翌弘安五年一月十三日の三十六日の間に、身延入山後始めて他出されていることが知られる。もっとも前述の妙法比丘尼御書の「門一町かどを出でず」の文に該当する他出であろうか。

。推定年代弘安四年十一月ごろの老病御書（定P一八九六）

「老病の上、不食気いまだ心よからざるゆへに、法門などもかきつけて申さずして、さてはてん事なげき入て候。又三嶋の左衛門次郎がもとにて法門伝て候けるが。」

立正大の鈴木一成先生は「この書の系年の根拠は筆跡と内容の二方面からなされる。筆跡は弘安の末期であることは疑うべくもない。執筆当時、生理的に衰弱されたことはその内容から推測できる。」と評し、三嶋の左衛門次郎のことには触れていない。又宮崎博士は「身延出遊が四年十二月以前にはなされなかつたというのは公式の出山という意味であつて内々の出遊のあつたことは内記左近書、老病書によつて証せられる。」との見解を示されている。次に

。弘安五年三月上旬 蓮三枚御書（定P一九一三）

「抑も三月一日より四日にいたるまでの御あそびに、心なぐさみてやせやまいもなをり虎とるばかりをほへ候上」この御書の真蹟は大石寺にあり堀日亨老師の説によつて弘安五年三月上旬南條時光に賜わりしものであるとの説によつて定本遺文も弘安五年説をとつているが宮崎博士はその出遊の時は弘安四年の三月と推定しているものである。隠棲の地として身延に入山せられた聖祖に公式出山などあり得ないのに、前述のように宮崎博士は「公式の出山という意味」を述べられている。それはどのような意味と会得すべきであろうか、「蓮三枚御書」の御あそびと「内記左近」の他行は共に内々の出遊であることは何人も異論はない。然しあそびは肉体的精神的快復とか気分転換とかいう意図がある。他行は他の地に行く、他所よそに行くという語意がある。従つて他所に行った一部始終は越後公御房の文に書いてあるということになる。それでも内々の出遊であるとも言えよう。然し内々の出遊であるなら内記左近に他所に行ったことを殊更日弁から聞くがよいと伝える必要はないのではないか。御あそびは単なる散步程度のことであつて他行は他所へ行かねばならぬ目的、理由があつたと推定できよう、即ち越後公御房に重要案件の指示を与え、内記

聖祖晩年に於ける日弁

左近の協力を促したものであろうか。

以下その理由を述べてみよう。

- 1 日興の御遷化記録に六老、中老中日向、日頂、日弁の名が見えないこと。
- 2 熱原法難後日弁、日秀が日頂の後見人となったが、日秀は聖祖の葬送に駆けつけているが、日弁は従来日頂の母、日妙尼との姉弟説を生むほどの近い間柄と伝えられているが故に日頂と行を共にしていたものか聖祖の死を知らなかった。

- 3 日向の上総法華堂の隣接に日弁の鷲山寺が建立されていること。

- 4 日興に従って改衣した日弁が日興離山の折日興と訣別し、日向のいる身延に残留したのは何故か。

- 5 鷲山寺旧記によれば「建治三年 宗祖直命により、宗祖の教化に浴した小早川内記の外護」とある。その小早川内記とは内記左近入道ではないか。

以上のことから、日向、日頂、日弁は聖祖の指示に随い共通の目的で教線の拡張に奔走していたので聖滅を知らせる急使が所在を確かめることができなかつたのであると仮定できないか、而して日向、日頂、日弁不参の理由を知ることがかりとしたい。伝燈鈔^⑥によれば聖祖の第三回忌に遅れたため義父富木常忍に対面もさせられず勘当同様の措置をされた日頂は尚数年愁訴したが許されなかつた。この頃日弁は輪番勤務しながら上総に向いて教導していたことは美作公御房御返事^⑦で知ることができる。故に日頂との交流が当然考えられてもよいのではないか。

正応四年三月（一二九一）日頂は朝廷向けの国諫状^⑧を行っている。翌々年の永仁元年（一二九三）には日弁は訴状^⑨を幕府に提出し本門の本尊に帰一せんことを上申している。

日頂の根拠である真間の弘法寺から身を避けた日頂の和名迦谷への弘通は永仁三年から開始されている。この和名

迦谷より約二〇Kの沼南町大井に日弁を開山とする妙照寺がある。このように日頂と日弁の活動があい提携して行われているように見える。故に日頂の母日妙尼との姉弟説が生じたのもかかる背景があったからであろう。

釈

- ① 定 P一六七七
- ② 宗全 史伝旧記部五 P一五二
- ③ 宗全 興尊集 P一一六〇七
- ④ 定 P九六二
- ⑤ 宗全 興尊集 P一一六
- ⑥ 妙法寺記の研究(蒼沼英雄) P一七〇
- ⑦ 定 P一四四一〇二
- ⑧ 定 P一六二二
- ⑨ 佐渡流人史 雄山閣 P一七〇
- ⑩ 定 P一五七一
- ⑪ 定 P一五三三
- ⑫ 定 P一五三四
- ⑬ 日蓮聖人と諸人供養 P一三七
- ⑭ 日本大歳時記(秋) 講談社 P三三五
- ⑮ わたしの健康(一九八一年) 六月号 P八三

聖祖晩年に於ける日弁

聖祖晩年に於ける日弁

- | | | |
|----|---------------|-------------|
| 16 | 日本大歳時記(秋) 講談社 | P 九七 |
| 17 | 講座日蓮 四卷 | P 一八七 |
| 18 | 講座日蓮 二卷 | P 二三七 |
| 19 | 日蓮に出会う 旺文社 | P 一〇 |
| 20 | 日蓮 筑摩叢書 78 | P 一 |
| 21 | 法華経下 岩波 | P 三三〇 |
| 22 | 定 | P 二二三 |
| 23 | 定 | P 一七二九 |
| 24 | 定 | P 一八九九〜一九〇〇 |
| 25 | 定 | P 一五三一 |
| 26 | 定 | P 一九〇六 |
| 27 | 定 | P 一九〇九 |
| 28 | 宗全 上聖部 | P 二四〜三五 |
| 29 | 宗全 興尊集 | P 一四六〜一六八 |
| 30 | 宗全 上聖部 | P 九〇 |
| 31 | 宗全 上聖部 | P 一九八 |
| 32 | 定 | P 一四四三 |
| 33 | 定 | P 一九〇七 |

③4 日蓮聖人遺文の文献学的研究 鈴木一成

P 四二三

③5 大崎学報 一〇三号

P 八

③6 大崎学報 一〇三号

P 八

③7 宗全史伝一

P 二

③8 宗全興尊集

P 一四五

③9 宗全上聖部

P 四〇

④0 宗全上聖部

P 八八